

おはなし玉手箱

【参】

幌村海行





## 「おはなし玉手箱」【参】

### 【目次】

|                 |       |    |
|-----------------|-------|----|
| 「バルセロナの熱い風」     | ..... | 3  |
| 「From darkness」 | ..... | 11 |
| 「路傍にて」          | ..... | 19 |



## バルセロナの熱い風

---

バルセロナへ到着すると、港は波も穏やかで、柔らかな陽射しが頭上から降り注ぎ、非常に開放的な雰囲気だった。

山岳地帯を横断するつもりで街外れのマーケットで古いオートバイを購入したのだが、それが思いがけぬポンコツで、草原を抜けそろそろ山道にさしかかろうという3日目、突如エンジンが焼け付き、マフラーから黒煙を噴き出して動かなくなってしまった。

ほの白い山々の稜線と、そこへ向かって延びる一本の道だけが草原の彼方へと続いている。

仕方がないので、バイクを乗り捨てて先を急ぐことにしたが、山が近づくにつれいよいよ陽射しが強くなり、私は一時間おきに道端の木陰に憩い、リュックサックから水筒を取り出して喉を潤した。

途中、運良くバスを拾うことが出来た。

乗客はみな辺りの農夫らしく、黒い野良着に身を包み、どの顔も馬の鞍みたいだった。

楽しそうにワインボトルを回し合い、見ず知らずの私にも気前よく振舞ってくれた。

山を越えて間もなく大きな街に着いたので、特に当てもない私はそこでバスを降りた。

古い街並みがとても美しく、時折吹きつける南風は心地よかった。

私は街路樹の立ち並んだ石畳をのんびり観光し、街外れの小さなホテルにチェック・インした。

先の予定など何もなかったが、とりあえず二日分の宿代を前払いしておいた。

他にイギリス人が1人泊まっているらしい。

荷物はおかみさんが運んでくれた。

古びた螺旋階段が、一步踏み出すごとにギシギシ音を立てた。

部屋へ着いて荷物を整理していると、例のイギリス紳士がおよそイギリス人らしからぬ気さくさで声をかけてきた。

あまりにあっけらかんとしているので妙なイギリス人だと思ったのだが、実はアメリカ人だった。

おかみさんが勘違いしていたらしい。

私はそれでようやく得心がいった。

彼は感じのいいカフェを知っているからと、熱心に誘った。

とりあえずシャワーを浴びるからと言ってしばらく待ってもらい、さっぱりしてから一緒に出かけた。

カフェはホテルにほど近い広場にあった。

テラスに白い大理石張りのテーブルと籐椅子がいくつも並んでいたが、ちょうどポプラの大木が一本枝を伸ばして日陰を作っていたので、その下に席を取った。

穏やかな陽気の昼下がりで、時折南の方から乾いた風が吹き抜け、広場を横切って行く人影も疎らだった。

アメリカ人は奥でのんびり新聞を読んでいた給仕の方へ、

「ワインを一本頼む。それとニシンの酢漬けだ」

へたくそなスペイン語だった。

話が通じたかわからないが、給仕は新聞を椅子に置き、厨房の方へ入って行ったきりなかなか戻ってこなかった。

ワインとグラスを持ってやっと来たかと思ったら、

「すいません、お客さん。今はあいにくニシンを切らしちまいまして。つい先日祭りがあったもので・・・マグロ料理ならすぐ御用意できますが」

アメリカ人には通じなかったらしく、私の方へ、

「こいつ、何て言ったんだ？」

とでも言いたげな顔を向けてきた。

「今ニシンはないそうだ。マグロならすぐ用意できるらしい」

英語で通訳してやると、アメリカ人は肯いた。

「それでいい。それとソーセージかチーズも頼もう。わかるかい、ソーセージかチーズもだ」  
最後は給仕に向かって言っていた。

私は、

「それでいいから持ってきてくれ。あと、ソーセージかチーズもだ」

とスペイン語で言ってやった。

「かしこまりました」

給仕が頭を下げて店の奥へ引っ込んでしまうと、アメリカ人は私のグラスにワインを注ぎながら、

「なかなか上手いスペイン語を話すじゃないか。まだ、名前も聞いてなかったっけ」

「シマムラ・アキラ。日本人だ」

ヒュウッ、と彼は口笛を吹いた。

「ニッポン人だって?そりゃ珍しいや。俺はマイケル・ブランドン。ニューヨークで記者をしている。取材でスペインを回ってるんだ。よろしくな」

そう言って自分のグラスにもワインをなみなみと注ぎ、私のグラスにカチンと合わせて一気に飲み干した。

「こうして同じ宿で一緒になったのも何かの縁だろう。どうだい、しばらくは一緒に旅して回らないか?何たって、俺はスペイン語がへたくそでね」

差し当たって目的もない私に、もちろん否はなかった。

それからしばらく、我々は朝早く起きてホテルで朝食をとり、件のカフェではコーヒーを飲みながらチェスを楽しんだりした。

昼下がりの街をぶらつき、教会へ足を運んだり、民芸市を楽しんだり、闘牛を観に出かけたり、時は夢のように過ぎて行った。

マイクはここでの出来事を記事にして雑誌社へ送るようなことを言っていたが、いっこうにそんな仕事をしている風には見えなかった。

5日目だったか、いつものようにカフェテラスで一杯やっていると、彼が突然釣りに行きたいと言い出した。

「おい、アキラ。この辺に釣りの出来る場所がないか訊いてみてくれないか。俺がここへ来たのもそれが目的なんだが、いい釣り場が全然見つからないんだ」

私は隣の席で議論に熱中していた二人の農夫を捕まえ、どこか良さそうな釣り場はないかと訊いてみた。

「でしたら旦那方、フィエスタって牧場の近くがいいですよ。あそこじゃ以前、こんぐらいでっかいマスが釣れたもんですだ」

一人が両手を大きく広げて自慢げに笑うと、もう一人はあからさまに眉をひそめ、

「何言ってるだ。そげにでっかいマスがおるもんかい。それに、あそこで大物を釣り上げたのはお前じゃねえ。オラだ。旦那、こいつの言うことなんてこれっぽっちも真に受けちゃなんねえだよ」

「だけど、そこがいい釣り場だってのは本当なんだろう？」

「そりゃホントです。あそこじゃ実によく釣れます。オラが言うんだから間違いはねえ」

マイクに伝えると、彼は非常に喜んで、農夫たちに酒を一杯ずつ振舞った。

それから、どのバスで行けばいいかを教えてもらい、店を出た。

翌朝早くホテルを出発し、4時間近くバスに揺られて目的地に到着した。

バス停から牧場まではほんの目と鼻の先で、彼方に黒い巨大な牛の群れがのんびりと草を食んでいる姿が見える。

「ここが例の牧場かい。立派なもんじゃないか。見ろよ、強そうな牛がわんさかいるぜ」

釣具と荷物を担いでバスから降りると、マイクは気持ち良さそうに目を細めた。

「フィエスタだなんて、いかにもな名前だな」

顔を見合わせて笑っていると、後から声がかかった。

「あんたら、どっから来なすった？」

振り返ってみると、小柄な猫背の老人が日焼けした顔に満面の笑みをたたえて佇んでいる。

「彼はアメリカ、僕はニッポンから来た旅行者なんだけど、街でこの辺りに最高の釣り場があると聞いてやってきたんだ」

私はスペイン語でそう言って、釣竿を見せた。

「そりゃあまた、えらい遠くからお疲れさんでしたなあ。釣り場ならすぐそこですが、まあ、

まずは牧場の方を見てやっただせえ。気に入ったら泊まっていたいで構いませんだで」

「そいつはありがたい。よろしく頼むよ。僕はアキラ。彼はマイクと言って、アメリカの記者さんだ」

老人は笑顔のまま我々と握手を交わし、

「わしはアンセルモいいますだ。この牧場で牛を育てとります。さあ、牧場の中を案内しますで、ついてきてだせえまし」

先に立って歩いて行った。

牧場は大草原とも見まごう広さだった。

木々の梢ではムクドリが巣作りに忙しいようで、小枝をくわえて戻っては、またすぐどこかへ飛んで行った。

牛舎の牛は10頭いたが、中に一頭ひとときわ目を惹く立派な牛がいた。

他の牛より角も身体も一回り以上大きく、ビロードのようにつやつやと黒光りしている。

「こりゃ凄い!」

マイクが目を丸くした。

「何て立派な牛だろう」

「これは来年のフィエスタに出すヤツですだよ。これだけの牛は国中探したって見つかりっこねえですだ」

「こんなのと闘う闘牛士がいるのかい?」

「1人いますだ。ロメロって若い闘牛士だども、今年一番の牛を倒しましてね。今じゃすっかり英雄ですだ」

「ふーん。こいつと闘おうなんて、頭のネジが2、3本吹っ飛んでるんじゃないか」

「それでもヤツは闘いますだ。何たって国の英雄ですからね。きっとこの牛と最高の闘牛を見せてくれますだよ」

ひと通り牛舎を見て回った後、牧場主カルロスの屋敷へ案内された。

元闘牛士のカルロスは我々を快く迎え、宿代わりに空き部屋を2つ提供してくれた。

彼の書斎には、若い頃に闘牛で得たらしい数え切れないほどのトロフィーや写真が飾られている。

けれど、我々を最も驚かせたのは、二人の美しい姉妹、カルメンとマリアだった。

姉のカルメンは私と同一歳で、フランスへ留学中。

夏期休暇を利用して帰省しているそうだ。

妹のマリアは日本で言えばまだ中学生ぐらいの多感な年頃、子供らしさの残るあどけない顔立ちをしていた。

釣りはまた後日ということにして、夕食までのわずかな時間にあてがわれた一室で安物のペーパーバックをめくっていると、マイクがやってきた。

「おい、あの姉妹を見たら。あのオヤジの娘とは思えないぜ」

「そうかい」

本から目を離さず、気のない返事を返すと、彼は軽く私の肩を小突き、

「とぼけるなよ、顔に書いてあるぜ。お前、あのカルメンって娘に・・・」

「バカ言え」

「とか言いながら、耳まで赤くなりやがって」

「おかしなことを言うなよ。カルロスに殺されちまう」

お茶を濁したものの、カルメンは本当に美しく、彼女の鳶色の瞳に何かを感じたのも確かだった。

そのせいというわけでもないだろうが、夕食は実に和やかで愉快的なものになった。

さすがに物書きらしく、マイクはいろんな話題を面白おかしく話して聞かせ、何度もみんなを笑わせていた。

「アキラはニッポン人なのよね」

朗らかな笑い声が一段落し、カルメンが振り返った。

どうやら、日本という国に興味があるらしい。

知識も豊富で、日本について語る時、彼女は夢見るような眼差しになった。

「キョート、ナラ、本当に美しい街だわ。文化も素晴らしくて、浮世絵なんか特に有名よね。ヒロシゲ、ホクサイ、シャラク、ウタマロ・・・」

「ねえ、キミは日本をよく知ってるようだけど、前に来たことがあるの?」

不思議に思って訊ねてみると、カルメンは首を振って、

「残念だけど、一度も。でも、いつか行ってみたいと思ってるわ。あの国は大好き。文化的で、礼儀正しくて」

「その時はきっと案内するよ」

「ホント!?約束よ」

「ただ、かえってガッカリしちゃうかもしれないな。今のあの国は・・・」

言いかけて、私は口を噤んだ。

あまりに居心地が良かったため、饒舌になりすぎている。

せっかく自分の国を讃えてもらっても、素直に喜べないのがどこか寂しかった。

夕食後、居間へ移ってカルロスの若い頃の話聞いた。

彼が本格的に闘牛を始めたのは13歳の時。

最盛を極めたのが、20歳からの三年間だった。

特に23歳の時には、各紙から「最も華麗な闘牛士」との称賛を浴び、国内にその名を知らぬ者がいないほどだった。

ところが、翌年結婚してカルメンが生まれると、彼の演技にはそれまでのような冴えが見られなくなった。

世間は家庭を持った闘牛士などつかいものにならないと噂した。

30歳を目前にして、体力の衰えもあったのか、演技のさなか牛の角に背後から突っかけられ、4ヶ月間ベッドへ釘付けにされるハメになった。

妻は二人目が生まれるのだからもう闘牛をやめて欲しいと望んだが、カルロスは頑として受け入れなかった。

そして、2度目の大怪我。

ついに、彼女は2人の娘を残して彼のもとを去った。

以来、カルロスは闘牛の世界からきっぱり足を洗い、牧場主という現在の立場に落ち着いたそうだ。

ベッドが上等すぎるせいか、夜が更けてもなかなか寝つかれなかった。

あきらめて表へ出、牧場の柵にもたれて星空を眺めていた。

どこからか川のせせらぎが聞こえてくる。

丈の高い草原が風に吹かれるたびサラサラ鳴り、あちこちで蛍の光が淡く揺らめいていた。

私はポケットから煙草を取り出し火を点けた。

ふと背後に人の気配を感じて振り返ると、白いガウンを羽織ったカルメンが立っている。

彼女は空を見上げたまま、小さな声で、

「星がキレイね」と呟いた。

一瞬喉が詰まる感じで、私は身じろぎもせずに立ち尽くした。

「眠れないの?」

「うん。何だか静かすぎてね」

「本当に静かね。パリのよう賑やかな街で過ごしていると、帰ってくるたびいつも静か過ぎる気がして落ち着かないの。田舎なのよ、ここは」

「パリ・・・花の都か。ステキな街なんだろうね」

ちょっと微笑み、肯くでもなく、カルメンは話題を変えた。

「スペイン語、上手なのね。どこで習ったの?」

「大学で専攻してたんだ。こっちへ来てずい分鍛えられたよ」

「よその国の人に自分の国を理解してもらえるのは、嬉しいことだわ」

口元に白い歯がこぼれ、息が止まるほど美しかった。

「キミはそうして笑っている方がずっとステキに見えるよ」

意識するでもなく、そんな言葉がこぼれ出てしまい、ハッとした時には遅かった。

カルメンは顔を赤らめて俯いてしまい、急に気まずい空気が漂った。

私はいよいよ胸を塞がれる感じがして、とにかく何か話題を探さねばと血眼になった。

「それにしても、お父さんは凄い人だね」

苦し紛れに口を突いたその一言に、カルメンの顔色が変わった。

それまでとはうって変わった厳しい顔つきで私を見つめ、挑みかかるような口調で言い放った。

「あなたにはわからないのよ。闘牛士の家族が・・・母がどれだけ心を痛めていたか」

「だって、お父さんは国の英雄だったんじゃないか」

「そうよ。みんなから英雄、英雄ってチャホヤされて有頂天になって。あの時だってそう。母が泣いて頼むのに、まるで耳を貸さなかった。女一人守れないあんな男、英雄でも何でもないわ。

こんな気持ち、あなたにわかりっこない！」

吐き捨てるのと、別人のようなつんけんした態度でその場から立ち去った。

何が起きたかわからなかった。

私は呆然と暗闇に吸い込まれて行くカルメンの白い後姿を見送った。

それから、煙草を木の柵に強く押しつけ、消した。火の粉がパッと散って、辺りはまた暗くなった。

遠くで鳴いている梟の音が、一段と大きくなったような気がした。

翌朝、朝食を終えると私とマイクは予定通り釣りに出かけた。

アンセルモに案内してもらったつもりだったが、カルメンとマリアが連れて行ってくれるというので、お言葉に甘えることにした。

森の小道を川べりへ歩きながら、マリアは楽しそうにはしゃいでいた。

私の腕を取って飛び跳ねたり、蝶を追って駆け回ったりする。

「マリアったら、アキラたちが来てよほど嬉しかったのね。あんなにウキウキしたあの子を見るのは久しぶりだわ」

カルメンが横で耳打ちした。

川の水は冷たく透き通っていた。

さっそく並んで釣り糸を垂れたが、まずはマイクに先を越されてしまった。

私もすぐ玉虫色に輝く大きなニジマスを一尾釣り上げたが、午前中の成果は良いとはいえなかった。

日が高くなったので、休憩して昼食をとることにし、カルメンたちが作ってくれたサンドイッチを食べ、川に浸して冷やしておいたワインで乾杯した。

それから、また午後の部が始まった。

マイクは上流にもっといい釣り場があると教えられ、マリアに案内されて行ってしまった。

私は御伽噺に出てくるような深い森の奥に、カルメンと2人きりで取り残される格好になった。

昨夜のことを思い出して何だか落ち着かなかった。

内心まだ腹を立てているだろうと思ったからだ。

「きのうはゴメンなさい、あんなことを言って」

「ん？」

よく聞こえなかったので、咄嗟に訊き返してしまった。

「正直、私は父が憎かった。それでわざわざフランスの大学へ進んだんだけど、久しぶりに帰って見たら、そんな気持ちも薄れていたの。なのに変よね。きのうはどうかしてたんだわ。あなたに八つ当たりして・・・ホントにゴメンなさい」

「いいんだ。人の気持ちって簡単じゃないし。だけど、いずれ時が経てばわかり合えると思うよ」

「ありがとう、アキラ。優しいのね」

私はその言葉に顔が赤らむのを感じた。

「ねえ、アキラ。私と一緒にパリへ行かない？」

カルメンは真剣で、冗談を言っているようには見えなかった。

「本気なのかい？何で急にそんなことを・・・」

「昨夜思ったの。あなたとならうまくやっていけるかもしれないって・・・。実は私、今あることを始めようと準備を進めてるの。それは・・・」

彼女は急に口を噤んだ。マリアたちが戻ってきたからだ。

マイクは一日の釣果に得意満面だったが、私は邸へ戻った後も、カルメンの言葉がずっと引っかかっていた。

夕食の後、部屋で横になっていると、ドアが開いてマリアが入ってきた。

両腕に大きなバラの花束を抱えている。

「キレイでしょ。裏庭にたくさん咲いてるの」

「僕に?・・・ホントにキレイだね。ありがとう」

花束を私に渡し、悪戯っぽい笑顔で訊ねてくる。

「ねえ、アキラ。わたしとカルメン、どっちが好き？」

「どっちって・・・2人とも好きだよ」

「ウソ。アキラはカルメンの方が好きなんですよ。だって、さっき2人きりであんな楽しそうに話してたじゃない」

「あれは何でもないよ。2人でニッポンの話をしてただけだ。それだけだよ」

「ホントにそう？」

「うん」

「いいわ。信じたげる」

マリアは私の隣に座っていたが、静かに立ち上がり、部屋から出て行った。

ドアを閉める時に言った。

「わたし、アキラが好き」

マリアの笑顔がよぎるたび、苦い想いとらわれた。

まるで私が永遠にここに続けると信じきっているかのような無邪気な瞳。

どうすれば彼女を傷つけずにここから立ち去れるのか、私にはさっぱりわからなかった。

いっそカルメンに相談してみようかとも思ったが、姉妹の間に溝を作るような厄介事を持ちかけるわけにいかない。

途方に暮れ、その時も私はまた裏庭に立ち、ピレネーの彼方へ沈みかける夕陽を眺めていた。

「ねえ、アキラ。こないだ言いかけたことなんだけど・・・」

ためらいがちなカルメンの声に、私は振り返った。

「ああ、一緒にパリへ行こうって話?何かを始めようとしてるって」

私の言葉に、カルメンは黙って暮れ行く夏の夕陽を見つめていたが、不意に向き直って首を振った。

「あれは違うの・・・あの・・・」

一瞬言葉を呑んで唇を噛んだが、彼女は胸のつかえを一気に吐き出すように続けた。

「正直に言うわ。何故かしら・・・あなたを愛してしまったの。だから、わたしと一緒に来て欲しかった」

背筋に震えが来た。

私は不意に腕の中へ飛び込んできたその美しい女を、夢中で抱きしめていた。

求められるまま唇を重ねる。

急に背後で声がした。

悲鳴じみた甲高い声。

「アキラのウソつき。大嫌い!!」

マリアだった。

手にしていたバラの花束を放り出し、そのままどこかへ行ってしまった。

カルメンは私から離れ、マリアを追って駆け出した。

私は投げ出されたバラの花を一本一本丁寧に拾い集めて持ち帰った。

夕食の時間になってもマリアは食堂に現れず、私が部屋のドアをノックしても決して開けようとしなかった。

「事情はわたしから説明するから、あんまり気にしないで」

カルメンはそう言ってくれたが、気分は塞いでいた。

アンセルモもマリアに聞いたらしく、

「心配せんでも、マリアお嬢様ならいずれわかってくれますだよ。ただ、このことは旦那様には内緒にしておいた方がいいです」と言ってくれた。

しかし、やはりこれ以上彼らに甘えているわけにはいかない。

翌朝にでも出て行くつもりで、私はその旨をカルロスに伝えた。

彼の書斎を出てカルメンのところへ挨拶に行ったが、その時ちょうど彼女の部屋のドアが開いて

マイクが出てきた。

私に気づくと、無言のまま苦笑いですぐ横を通り過ぎて行った。

私は呆然と立ち竦んでしまい、カルメンのところへは行かず、そのまま部屋へ戻った。

ベッドに入ってもまんじりともせず、窓から射し込む月明かりを見ていた。

何かとても大切なものが手の中から飛び去ってしまったような、そんな気持ちだった。

明け方になり、やっとうとうとしかけたところへ、真っ青になったマリアが飛び込んできた。

「アキラ、早く来て!・・・パパが大変なの!!」

切羽詰まったその声に、私はあたふたとベッドから転び出た。

「どうしたの?」

「パパが・・・パパが姉さんとマイクを撃とうとしてるのよ。早く止めて!!」

いったい何なんだ!?

わけのわからぬまま、私は慌てて部屋を飛び出した。

玄関を出たところで、目の前をマイクの運転する真っ黒なルノーが爆音を上げて走り過ぎた。

助手席にカルメンの姿がある。

すぐそばでカルロスが、車に狙いをつけ、ショットガンを構えている。

「撃っちゃダメだ!!」

私が叫ぶと同時に、黒い銃口が火を噴いた。

ルノーは一瞬で炎上し、轟音とともに路肩の大木へ激突した。

そのさまは、あたかも巨大な牡牛が、闘牛士の剣の前に最後の突進を試みる姿にも似ていた。

我に返り、慌てて駆け寄った時は、もうどうすることもできなかった。

呆然と立ち尽くすカルロスの手からショットガンを取り上げると、老いた闘牛士はただ、

「俺は娘を愛していた。カルメンを愛していただけなのに・・・」

放心したように繰り返すだけだった。

燃え盛る炎を前に、その姿はげっそりとやつれ果てて見えた。

その後、事件の場に居合わせた私も、警察の事情聴取を受けた。

何を訊かれても、答えようがなかった。

なぜあんなことになったのか見当もつかない。

想像することさえ困難だった。

ただ、カルメンは私よりマイクを選んだ。

そういうことなんだろう。

自分に言い聞かせるだけで精一杯だった。

後で刑事から伝え聞いたカルロスの供述によれば、カルメンはマイクと2人でニューヨークへ行くと言いきり、彼がいくら反対しても耳を貸さず、ついにはあの凶行に及んでしまったとのことだった。

片田舎のちっぽけな事件は、元英雄の犯行というだけでたちまち国中へ広がり、各紙とも様々な見出しで面白おかしく書き立てた。

牧場の経営は当面アンセルモが引き継ぎ、マリアはアンダルシアの親戚へ預けられることになった。

私は彼らにさよならを言って、その地を去った。

ほんの数日滞在しただけのはずが、日本を出る時にも感じなかった切なさが胸を締めつける。

実に寂しい別れだった。

最後に、マリアはしゃくり上げながら一輪の紅いバラをくれた。

バルセロナの港は相変わらず穏やかだった。

柔らかな陽射しが頭上から降り注いでいる。

それでも、私の胸は着いた時と同じように重く沈んでいた。

一つだけ違うのは、そろそろ夏が終わり、ひんやりした秋風が吹き始めていることぐらいだ。

私は最後の煙草に火をつけ、色とりどりのテープが乱れ舞い、出航のドラが鳴る中、一人デッキを去り、船室へと降りて行った。

完



## From darkness ～なじみの店で、見知らぬ誰かに会うこと～

---

「ペニーレーン」はなじみのバーだが、その時彼は薄暗い店の片隅で一人球を撞いていた。天井から低く吊り下げられた電球が、端正な顔に陰影を添えている。僕はカウンターでマスターと話しながらウイスキーを舐めていたが、奇妙な暗さを漂わせている隅の青年に何か惹かれるものを感じた。ちょうど、彼の周囲にだけエアポケットができて外界と彼とを仕切っている。そんな雰囲気だった。実際、彼はひどく哀しい眼をしていた。何を哀しんでいるのかわからないが、あんなに暗く沈みきった瞳に出くわすのは初めてのことだ。僕はマスターに訊ねた。「初めての客？」「え？」「ほら、さっきから一人で玉突きしてる……」「ああ」マスターは初めて気づいたように肯いた。「らしいね。キミと同じぐらいの歳じゃないか」「どう観る？」もちろん、ビリヤードの腕だ。容姿や体格は関係ない。僕にそっちの趣味はない。「ご覧よ」僕の問いかけには答えず、マスターは声を潜めた。見ると、つい今しがたまで隣の台で三人の女の子とエイト・ボールに興じていた若い男が、キューを担いで彼のところへ遠征している。ちょっと見にはオーランド・ブルーム似の日本人離れしたその色男は、名前こそ知らないが、店ではよく見る顔だった。あまり好きになれるタイプではないのだが、彼の腕がなかなかなのは知っていた。僕ほどではないにせよ、だが。僕の腕前ときたら、マスターの折り紙つきでとびきりなのだ。友人たちはもちろん、店の常連客にも僕に勝てる者はいなかった。「なるほどね」親衛隊にいいところを見せるため見知らぬ相手をカモにしようなどと、いかにもあの男の考えそうなことだ。僕はマスターと顔を見合わせ微笑を交わした。マスターは言った。「さて、お手並み拝見といこうか」ゲームが進むにつれ、かのオーランド・ブルーム氏がみるみる蒼ざめていく様は、なかなか小気味良かった。

カモにするつもりがすっかりカモられて、女の子たちの手前、どうにも引っ込みがつかなくなってしまった格好だ。

隅の青年は、神業みたいな正確さで次々と的球を狙ったポケットへ落としていく。

カウンターから遠目に見ても、その腕の差は歴然としていた。

「見事なもんだ……」マスターがつぶやいた。

「はは」僕は力なく笑った。「鮮やかすぎて、声も出ないよ」

他の台の連中も、ハスラーみたいな彼の腕前に圧倒され、手のほうがすっかりお留守になっている。

7ゲームを一方向的に撞ききってしまうと、彼は冷たい声で言った。

「これ以上は無意味だと思いますが」

「あ、ああ……」

オーランド・ブルーム氏は悄然と肩を落とした。

心の中ではきっと、突き上がってくる羞恥心と格闘し、女の子たちへの言い訳を考えるのに四苦八苦しているのだろう。

だが、この場合そんな必要はない。

ただ、相手が悪すぎただけだ。勝負事にはありがちなことである。

「どうだい」と、マスターがそそのかすような口調で顎をしゃくった。「あんたと彼のゲームなら、仕事をほっぽり出しても見てみたいがね」

むろん、そのつもりだ。

僕はグラスをカウンターに置き、スツールから立ち上がった。

グラスの中で氷がすずやかな音を立てた。

僕がキューを持って傍に立つと、彼はちらっと視線を上げた。

「やあ」と、僕は微笑んだ。

「さっきのゲームを見なかったのかい？」

「見たよ。だからこそさ」

「ふうん」

暗い瞳がキラリと光った気がした。

彼は低い声で、

「自信がありそうだね」

「どうかな」

「ルールは？」

「ローテーション」

さっきのゲームで彼の腕前はわかっている。

手強い。

手強いが、僕もビリヤードではマスター以外に負けたことはない。

強い自信があった。



彼の腕については充分認識していたつもりだったが、その甘さを僕はやがて悟ることになった。壁面のボードは、僕が彼に対し3ゲームに一度ブレイクするのがやっとなのであるのを示している。ずいぶん長いことそうして無残な敗北を繰り返していたような気もするが、時計を見るとまだ30分しかたっていない。

「参ったね……」思わず声が洩れた。「まるで大人と子供だ」  
僕のつぶやきが聞こえたのだろう。彼は台の上から顔を上げた。

「もう、やめにするかい？」

「ああ」僕は肯いた。「やるだけ無駄だ。あんたは強すぎるよ」

「でもないさ」

彼はヘッド・スポットに手玉を置き、別段嬉しそうでもなく、また台に覆いかぶさるようにしてキューを構えた。

「どうだろう」と、僕は提案した。「ゲームのお礼に何かおごらせてくれないか？」

僕らが連れ立ってカウンターへ戻ると、マスターが興味深げに訊ねてきた。

「どうだった？」

「ダメダメ」と、僕は肩をすくめた。「まるでゲームにならないよ。あ、マティーニを二つ」

「へえ」マスターは目を丸くして、隣の彼を見た。

それから、注文のグラスをこちらへ遣して話しかけた。

「この人はうちの常連の中では一番腕がいいんですがね。一度私ともお手合わせ願いたいものですね」

「いつでもどうぞ」

彼はそう答えてグラスを上げた。

僕は眼の前の二人を見比べ、彼らがゲームをしたらちょっと面白いことになるだろうなと思った。

「新しい友人に」と、僕はグラスをかざした。「オレはノブヒコ。キミは？」

「コータロー」

こうして僕は彼の名を初めて知ったのだが、それは彼の醸し出しているあの哀しげな異邦人的雰囲気とおよそかけ離れていた。

「ノブヒコだっけ」

しばらくビリヤードについて他愛ない話をした後、コータローは唐突に言った。「キミってなんかこう、少し変わってるね」

「あん？」

「何だってオレなんかに興味を持つ？」

「簡単さ。キミも変わってるからだよ」

彼はちょっと毒気を抜かれたような顔をしたが、すぐ笑い出した。

「つまり、こういうことさ」僕は間髪を入れず続けた。「オレは今フツーっていわれてる連中が大嫌いなんだ。女の機嫌を取ることしか考えられない男も、男とカッコ良く別れることしか考え

てない女も、みんなクソ食らえだ。わかるかい？」

彼は黙って耳を傾けている。

「キミを見た時、不思議な気がしたよ。なんていうかこう、哀しいんだな。ただ球を撞いてるだけなのに、妙に哀しいんだ。何を哀しむことがある。今の世の中、そんな深く哀しむことなんてありゃしない。せいぜい女にフラれたとか、人間関係がうまくいかないとか、その程度さ。でも、オレはなんとなくキミが哀しそうなのは、そんなのと根本が違っている気がするんだ。で、その理由に興味を持ったわけさ」

「ふうん」と、彼は意外そうにつぶやいた。「オレはそんなに沈んで見えたのか……そんなつもりはないんだけどな」

「違うのかい？」

彼は顔をそむけ、ちょっと唇を噛んだ。

そして言った。

「サイボーグって知ってるかい？」

「マンガや小説に出てくる改造人間だろ。仮面ライダーみたいな。まさか、キミがそうだったのか」

「ジョークだよ。こういうのは嫌いかい？ 実は女と別れたばかりなんだ。失望した？」

「少しね」

「でも、世の中男と女しかいないんだから、男が女の尻を追っかけたって少しも不自然じゃないだろう。オレはそう思うがね」

「……」

僕はコータローの無表情な横顔を見ながら、何かまだ釈然としないものを感じた。

実際、彼はひどく哀しげな眼をしていた。何が哀しいか知らないが、あんな暗く沈みきった瞳に出くわしたのは初めてだった。

## ～愛する女と二人きりで旅をすること～

---

風が出てきたらしく、湖水に小さな波が立ち始めた。

波は幾重にも折り重なるようにして、緩やかな曲線を描きながら岸のほうへ向かっている。

その波にボートを揺すられ、僕は目を覚ました。

いつしかすっかり眠り込んでしまったようだ。

船尾に掛けておいた竿を上げてみたが、何もかかっていなかった。

餌を新しいものと取替え、錘を少し軽くしてから、釣り糸をもう一度前方へ投げてやった。

それから、膝の上のシートを掛けなおし、岸に沿って漕いでいった。

湖から見ると、この辺りの眺めは実に美しい。

すっかり色づいて葉の落ちかけた木立の長い列と、戸を閉めきった別荘地の白い建物がいくつも並んでいた。

湖に点在する小島の一つを通り過ぎると、岸壁は下方がずいぶん削り取られ、その辺から急に水が深くなっていて、岩が澄みきった水の中へ斜めに落ち込んでいる。

僕はオールをゆっくり動かしながら、釣り糸と、湖面と、きれいな湖岸の表情とを、順繰りに眺めた。

風のせいか水はとても冷たく、遠くで水鳥たちが時に何十羽もの群れをなし、ゆらゆらと羽根を休めている。そして、時折思いついたように飛び立っては、また湖に舞い降りてきた。

不意に釣竿が大きくしなり、糸がグッと水中に引き込まれた。

オールをボートへ引き入れ、僕はそっと船尾に移り、竿を握った。

鱒の重みが竿先を通して感じられる。鱒がしっかり食いつくよう注意深く糸を手繰り寄せ、立派な体格のきれいな魚体を力強く引き上げた。

鱒はしばらく暴れていたが、尾のほうをしっかりと握ってボートのへりに強く頭を打ちつけると、すぐ動かなくなった。

大きな笹の葉を敷きつめた上に、他の鱒と並べて置いた。

涼しい季節で、腹を裂く必要もない。

もう陽が落ち始めていた。

風も心なしか強くなっているようだ。

僕は上着のポケットから煙草を取り出し火をつけると、ホテルのある岸に向けて漕ぎ始めた。

僕たちの泊まっているホテルは、湖岸から少し引込んだ小高い丘の麓に、湖を覗き込むような格好で建てられている。

外交官の父に連れられ、何度か来たことがあった。

一流のホテルだが、シーズン・オフで、宿泊客は何人もいなかった。

以前やって来たのは二年前だが、支配人は覚えてくれていた。

彼の英語にはちょっとフランス訛りがあって、リカコはそれがいたくお気に入りだった。

彼は僕を父と同様に扱ってくれ、二人のためはかなり上等な部屋をあてがってくれたばかりか、料金もそこらの小さなホテル並に引き下げてくれた。

秋も盛りの湖畔。湖に面した静かなホテル。フランス語みたいな英語を話す支配人、腕のいいバーテンダー。何もかもが素晴らしかった。

湖が黄金色に輝き始める頃、やっと岸にたどり着いた。

オールを引き入れ、僕は石垣の間の船寄せ場へボートを引き上げにかかった。

支配人の息子のハリーが手伝ってくれた。

「釣りはいかがでした？」

「楽しかったよ。明日はいっしょにどうだい？」

「はい。でも、この風だと明日は雨でしょう」

僕はびっくりして湖を振り返った。

「だって、こんなにいい天気だよ」

湖は沈む夕日で金色の波を立てている。

その向こうに、山々のシルエットが悠然とそびえていた。

「わかるんですよ」と、ハリーは微笑んだ。「長いことここで暮らしていますからね」

笑うとはにかんだような表情になり、まだティーンにさえ見える。

実際は僕より一つ年下だった。

彼はスキーやスケートの客でごった返す冬のシーズンに備え、暖炉の薪を割っていたのだった。

釣った魚と釣具をハリーに預け、僕は一人で部屋へ帰った。

ドアを開けて中へ入ると、リカコは窓際の椅子で紅茶を飲みながら本を読んでいた。窓の外から夕陽が射し込み、その姿を絵のように浮かび上がらせている。あまりの神々しさに、一瞬立ち尽くしてしまった。

彼女はそんな僕に、顔を上げて微笑んだ。

「おかえりなさい。楽しかった？」

「うん」

僕は上着を脱いでハンガーにかけ、彼女のそばにかがみこんで軽くキスをした。

それから、並んで外の景色を眺めた。

「ずっとあなたのポートを見ていたわ。寒くなかった？ コーヒーでも飲む？」

「それより下で食事をしよう。なんなら、ここへ運んでもらおうか」

「いいわ、下へ行きましょう。このレストランは素晴らしいわ。こんな静かできれいな所、日本には絶対ないわよ」

「そうだね」僕はシャツを着替え、ネクタイを締めた。「本当にその通りだ」

リカコはドレッサーの前で髪を梳かしていた。

僕はその後ろに立って、大きな鏡の上半分を使ってネクタイを直した。

鏡越しに視線が合うと、互いに微笑み合った。

「どうかしら」と、リカコは楽しそうに振り返った。「ねえ、おかしくない？」

「大丈夫。すごくきれいだよ」

僕らは上着を着ると、腕を組んで部屋を出た。

レストランの室内は、ディナーの際のキャンドルサービスに備え、照明が幾分押さえ気味だった。

大きな窓が開き、壁の漆喰には豪華な装飾が施されている。

二人で食事をしていると、僕はとても優しく、幸せな気持ちになった。

仔牛を食べ、ワインを飲んだ。

デザートには、アイスクリームを食べた。

仕上げに、給仕がいろいろなケーキをワゴンに乗せ、テーブルまで運んできた。

リカコはチョコレートを取り、僕はヨーグルトとブルーベリーを取った。

生地にブランデーが染み込ませてあり、まるやかな舌触りが心地良い。

「驚いたわ。ノブヒコ、あなたよく入るわね」と、リカコが呆れたような声を出す。

彼女はまた紅茶を飲んでいて。

「気持ちいいんだ」と、僕は言った。「ワインをもう一本欲しくないか？」

「もうたくさん、お腹いっぱいよ」

そう答え、リカコは笑った。

素敵なディナーと夢のようなひとときを満喫し、僕らは部屋へ戻った。

上着を脱いでネクタイを緩め、ベッドに横たわると、リカコがバッグから地図を持ち出してき

た。

赤鉛筆を手にしている。

「私たちがいるのはここよ」

そう言って、地図に丸を書き込んだ。

僕たちはベッドに地図を広げ、今までに行った土地を見つけ出してはそうして一つ一つ印をつけていった。すると、行ったことのある場所はすぐなくなってしまった。

「結構いろんなところへ行ったつもりだったけど、そうでもないのね」

「ひと月だからね」と、僕は肩を竦めた。「そんなにたくさん行けるもんじゃないさ」

「それもそうね。じゃあ、今度はこれから二人で行くところを探しましょうよ」

二人はこれからの旅の目的地を探し始めた。

残りの日数や交通手段などを考慮しつつ、行ってみたい有名な土地や、街の名前がきれいな所などを、僕らはたくさん選び出した。

リカコの考えた地図を使ったこのゲームは大成功だった。

二人きりの広いベッドで、僕たちはずいぶん長いことそうして地図に印をつけながら楽しい時を過ごした。

しばらくすると、部屋のドアが外からノックされた。

「はい。どなた？」

リカコの声に、若い男の声が返ってきた。

「支配人がアキヅキ様にお酒を差し上げたいので、ご都合をお伺いしたいと申しております」

柱時計を見ると、9時30分だった。

「どうしよう？」と、僕はリカコに訊いた。

「いいわ、行ってらっしゃい。たまには男同士にしてあげる」

僕はベッドから立ち上がり、

「すぐ行くと伝えてくれ」

「では、ビリヤード室でお待ちしております」

僕はまたネクタイを締め直し、上着を羽織った。

「遅くなるようだったら、先に寝んでてくれ」

「そうするわ。支配人には、私からもよろしくと伝えておいてね」

「わざわざお誘いいただき、何とお礼を申し上げてよいか……」

恐縮して頭を下げる僕に、支配人は温かな視線を向け、ゆっくりと首を振った。

「いえいえ。こちらこそこのような時間にお呼びたて致し、失礼しました。そろそろこのホテルもハリーに任せようと思ひましてね。お客様の少ない夜などは、一切任せきりにしておるのです……しばらくお会いしませんが、お父様はお元気ですか？」

「はい、おかげさまで」

「いつだったか、お二人でシャンパンを飲みながらゲームなさっているのをお見かけしましたが、あれは実に素晴らしい習慣ですな」

そう言って、支配人は壁の呼び鈴を押した。

すると、バーテンダーが銀の冷やし桶に入ったシャンパンを運んできた。

「ゲームの前に、乾杯といきましょう」

支配人は僕の方へ笑いかけてから、バーテンダーに「一本抜いてくれ」と言った。

僕たちは互いにグラスを目の高さにかざし、口をつけた。辛口の、爽やかな味だった。

ゲームは僕が手加減をしたので、なかなか白熱した。

僕のプレーを見守りながら、支配人は穏やかに言った。

「あなたはお父様によく似ておられますな。的球を狙う時の眼などは、実にそっくりですよ。血は争えんものですな」

「父をよくご存知なのですね」

「ええ、存じておりますとも。あの方は非常に素直な球さばきをなさる時と、何とというか、とてもクールな時がありましたな。外交官というお仕事のせいかと思っておりましたが、どうやら違ったようだ。あなたを見ているとそう思えます」

「それはきっと、私が幼いせいでしょう。歳をとるのは素晴らしいことだと思います」

「同感です。この歳になると、いろんなことが実にはっきり見えてきます……おや、また外してしまった。どうも、こればかりは歳に関係ないようすな」

そう言って、彼は微笑んだ。

支配人と別れて部屋に戻ると、リカコは眠っていた。僕は彼女を起こさないようそっと歩いて、部屋の明かりはつけずにバス・ルームへ行った。

シャワーを浴びてベッドへ入ると、すぐ隣に彼女の呼吸が感じられた。

表では、ハリーの言った通り雨が降り出したようだ。

夜中に雨の音を聞いていると、なんだかどす黒い日常へ引き戻されていく気がする。

あと一週間。

一週間でこの旅は終わってしまう。

どんな素敵な夢も、目が覚めれば消えてしまう。

どんな旅もいつかは終わり、思い出となって残るだけだ……初めからわかっていたじゃないか。

僕は旅の後に待っている退屈な日々を思い、気が遠くなりそうだった。

「ねえ、リカコ」

彼女が眠っているのは知っていたが、僕はその寝顔に話しかけた。

「このまま時間が止まってしまえばいいと思うよ」

コータローと知り合って二週間ほど経ったある秋の日、僕はリカコと二人きりでヨーロッパへひと月ほど旅に出た。

旅行ではない。旅だ……。

## ～わかっているのは、何もわからないということ～

---

旅から戻った次の夜、僕はリカコを連れて「ペニーレーン」へ出かけた。

彼女をコータローに引き合わせたいと思ったからだ。正直、自慢したかったのかもしれない。

カウンターの奥から顔を出したマスターが、彼女の方へ一礼し、隣の僕に声をかけてきた。

「旅はどうだった。楽しかったかい？」

「もちろんさ」

僕は肯き、店内をひとしきり見回した。コータローの姿は見当たらない。

「コータローくんならいないよ」と、マスターはボトルを磨きながら言った。

「一昨日やって来てね。街を出ると言ってた。あんたに会えないのを残念がってたよ。これを預かってる。あんたに渡してくれとさ」

彼は一枚の封筒を差し出した。

「何か言ってたかい？」

「これ以上彼といると、友だちになってしまいそうで怖いとさ」

「何だそりゃ？」

コータローが何を考えてそんなことを言ったのか、僕には見当もつかなかった。

「オレはすっかり友だちのつもりだったんだぜ」

「まあ、せっかく来たんだから少し撞いていきなよ」

30分ほどで店を出ると、僕とリカコはこれといった当てもなく夜の繁華街をぶらぶら歩いた。薄汚い街並み。汚物の染みついた道路。空き缶、紙屑、酔っ払い。毒々しいネオンの灯。両手を後ろで組み、少し前を歩いていたリカコが振り返った。

「ガッカリした？」

「何が？」

「コートローくんがいなくなって」

「出て行ける奴はいいさ」と、僕は幾分自嘲的に吐き捨てた。「ここがオレの故郷なんだ。このゴミゴミした汚らしい街がさ」

つい昨日まで、ヨーロッパの美しい景色の中で二人きりの時間を満喫していたというのに。そう思うと、無性に惨めな気分になった。

リカコのそばにいと、僕はいつも他のものが何も目に入らなくなってしまう。

彼女もそうであって欲しいと思うが、本当のところはわからない。

肩を並べて歩くうち、僕らはいつしか大通りから逸れ、人通りの少ない細い路地に迷い込んでいた。

そのことにまず気づいたのはリカコで、僕は彼女の不安げな表情で初めて気がついた。

彼女を安心させるため、ちょっとおどけて肩を竦め、柔らかな手をとって明かりの方へ向きを変えた。

この街は僕にとって庭のようなものだ。

道に迷うことなど決してない。

ところが、数歩も歩かぬうち、僕らは不意に背後から呼び止められた。

振り返ってみると、声の主は黒いスーツに身を包み、マジックミラーのサングラスで表情を隠した見知らぬ三人の男たちだった。

獰猛な猟犬の気配を漂わせ、ひと目で裏があるだろうと想像できる。

「アキヅキ・ノブヒコくんだね」

男の一人が念を押すように口を開いた。

僕が訝しんで答えずにいると、また別の男が言った。

「キミたちに迷惑はかけない。ただ、キミの友だちのコートローくんがどこへ行ったか知りたいだけなんだ」

慫慂な態度が、かえって抜き身の刃物を突きつけられたようなプレッシャーを感じさせる。

僕はリカコを後ろにかばい、低い声で訊いた。

「彼に何の用です？」

「キミには関わりないことだよ。知らない方がいい」

僕が考えたのは、とにかくリカコをこの場から逃がすことだった。

僕は彼らに悟られぬよう肩越しに囁いた。

「逃げるんだ」

「でも……」

「オレが飛びかかったら、振り返らず走れ。いいね」

言うやいなや、僕は彼女を明かりの方へ突き飛ばした。彼女は通りに向かって駆け出した。途中、後ろ髪を引かれたように一度だけ振り向いたが、僕が男たちに組みつくのを見届けると、もうまっすぐ視界から消えていった。

もちろん、本気でやり合う気はなかった。

先手必勝、一発かましてすぐ逃げるつもりだった。

こんな連中を相手にしたら、命がいくつあっても足りない。

中央の男が腰を落として身構え、残りの二人は左右に散った。

僕は真ん中の男につかみかかったが、相手は素早く上体をそらしてかわし、そのまま腕をつかんで振り上げた。先手を取ったつもりが、相手の方が一枚も二枚も上手だった。

僕は苦痛にうめいた。

構わず男は力任せに振り続ける。

全身に脂汗が噴き出した。

「さあ……」と、男は笑った。「コータローはどこへ行った？」

「知らないね。何も聞いてないよ」

男の腕に力がこもる。

「このまま腕をへし折ってもいいんだぜ」

何と言われても、知らないものは答えようがなかった。

それにしても、こいつらは一体……コータローの奴、何をしたんだ？

まるで動けなかった。身に覚えのない不意の襲撃に、気力を根こそぎ奪い去られていた。

リカコは助けを呼んでくれただろうか？

いや。

もう何を考えるのも億劫だった。

壁に凭れ、地べたに座り込んだままぼんやりしていた。

あれほど手酷く痛めつけられながら、まだ生きている自分が不思議だ。

よく晴れた夜空に、星の瞬きがきれいだった。

見るともなしに見上げていると、線香花火みたいな光がいくつか流れた。

僕は上着のポケットからマスターに渡された封筒を取り出し、封を切った。

完



## 路傍にて

---

風のない4月の日没近い時間だった。

他には一台の車も走っていないやけに立派な田舎道を、私は赤いアコード・ワゴンのステアリングを握り、ほとんど機械的にアクセルを踏み続けていた。

コクピットのスピードメーターはゆうに100km近かったが、見もしなかった。

もう何時間も運転し続けていたせいで、集中力がなくなっている。

窓の外は同じような雑木林ばかりの景色が何キロも続いていて、遠くの山々は静止したまま動かないのだが、アスファルトで塗り固められた路面に白くペイントされたセンターラインは、たちまち後方へ飛び去っていった。

道はゆるい下りが続き、その先で急勾配の上り坂になっていた。

夕陽はその道の彼方から、まっすぐこちらへ射している。

そのせいか、坂は中央だけが日陰になっていた。

ふと、ルームミラーに小さな黒い点が現れた。

私はコンソールの上のJPSを一本抜いて火を点け、さらにアクセルを踏み込んだ。

アコード・ワゴンは乾いた排気音を響かせながら加速していく。

しかし、それ以上のスピードで、背後から大型のトレーラートラックが迫った。

こちらも相応にスピードは出ていたはずだが、トラックはさらに上を行っていた。

他に車のない広い田舎道のこと。

抜こうと思えばたやすいはずだが、トラックは直後にピッタリつけたままミラーの中でさかんに車体を振り、からかうようにあおってくる。

何とか振り切りたかったが、朝から丸一日運転し続け疲れきった状態で、それ以上スピードを上げる気にはならず、二台は夕陽の下のまっすぐな舗装路を、まるでランデブーのように仲良く連れ添い疾走していった。

街の入口に近い交差点で、トラックは右折レーンに入り、我々は停止線にあわせて並んで停まった。

横断する人も車ももちろんない。

信号が青に変わり、トレーラートラックは野太い排気音と、馬鹿にしたような長いホーンを一つ残し、誰の見るでもないウインカーを出して右折していった。

嫌な気分でそのテールランプを見送ってから、私はまっすぐ車を出した。

街へ入る頃には、すでに日が暮れて夜になっていた。

今夜の宿泊地である道の駅を目指し、遮二無二車を走らせたが、間もなく疲労に耐えきれなくなり、南国風の丈高い街路樹の並ぶ路肩へ車を寄せて停めた。

それから、両側の窓とサンルーフを開けて、エンジンを切った。

夜になり、風が出てきたらしい。涼しい夜風が車内を吹き抜け、頭上で街路樹の枝たちがたえまなく囁き合っていた。

まだ7時を回ったばかりでさほど遅い時間ではなかったはずが、人影などまるでなく、田舎の寂しい夜だった。

ここからでは見えないが、どこかに貨物列車の操車場があるのだろう。

遠くで警笛の音や、貨車がレールの上を滑っていく音がしていた。

私は一つ深呼吸をして、これといって特筆すべきもののない夜の田舎町をぼんやり眺めた。

サンルーフの向こうの夜空は、満天に星が瞬き、街路樹の枝の隙間を通して月明かりも降り注いでいる。

フロント・ウインドーの50mほど先で、ストアが一軒、まだ店を開けていた。

私は車から降り、そこまで歩いて行った。

レジの奥で、額の禿げ上がった中年の店主が、読んでいた週刊誌を置いて立ち上がった。

そして、人好きのする笑顔で、

「こんばんわ」と、頭を下げた。

「ビールを2本ください」と、私は言った。

主人はガラスの冷蔵庫まで歩いて行き、振り返った。

「どれにしますか？」

「銘柄はどれでもいいんです」

私が言うと、彼は一番奥のよく冷えた黒ラベルのビンを2本取り出し、ビニール袋に入れた。

「ここんところ暑い日が続きますからね。こんな夜はコイツが一番です」

主人は言いながらレジを打ち込み、釣銭を確かめてから、私の方へ差し出した。

店を出る時も、彼は

「おやすみなさい」と、気さくな笑顔で送り出してくれた。

私は車へ戻り、最初の一本を一気に飲み干した。

キンキンに冷えて、素晴らしく旨いビールだった。

外気に触れると、ビンはたちまち汗をかいた。

2本目は昼間食べ残したドーナッツと一緒にゆっくり流し込んだ。

ドーナッツの甘味とビールの苦味が、いちどきに口の中へ広がった。

それも飲み終わると、私はまたJPSに火を点け、ステアリングの上で組んだ両腕に顎を寄せ、くわえ煙草のまま遠くを見遣った。

一台の白いハイエースが、私のアコード・ワゴンの横を走り抜け、先ほどのストアの前で停まった。

周囲は静寂そのもので、幾重にも折り重なった虫たちのシンフォニーだけが、ずっと聴こえている。

ハイエースの中から、可愛らしい女の子とその母親らしい美しい婦人が下りてきた。

すると、店の主人が飛び出してくるなり、女の子を抱え上げ、その子と婦人に何度となくキスを繰り返して、嬉しそうに店の中へ帰って行った。

どうやら、2人は店主の妻と娘らしい。

しかし、そんな微笑ましい情景も、私には何の効果もなかった。

なぜとなく、私は一人ずっと遠くを眺めつつ、ぼんやり考えごとに耽っていたからだ。 完



おはなし玉手箱【参】

<http://p.booklog.jp/book/60740>

著者：幌村海行

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/houshyo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60740>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60740>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ